
魔法少女リリカルなのは 主人公はこの俺さ！

くず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 主人公はこの俺さ！

【Nコード】

N8482U

【作者名】

くず

【あらすじ】

神の意向で死んでしまい転生できるといわれた人物は勝手な思い違いや変な妄想でどこまでも突っ走って最後は大抵主人公に倒されるといふ末路を送る、俗にいう勘違い系転生者だった！このものぐたりは主人公に負けないようにハーレム形成を目指す勘違い系転生者のお話※これはかなりの駄文です。あと原作ブレイクやキャラ崩壊がおきます。なのでそのようなことに嫌悪を感じる方はご遠慮下さい。

第1話来た！オリ主人生の始まりが！（前書き）

というわけで思いつきで始めた新作やばいほどいきあたりばっかりですが頑張ります！

もちろんもう一つの方も頑張るので応援よろしくお願いします。

かみかみうるせえ。神だけに。

「ハハッ、君なかなかいいセンスしているじゃないか。」

「なんのだよ!・・・・・・ハア。」

俺はツツコミをしてため息をついた。

「それで自称神が何の用だ？」

「実は・・・・・・君は現世であまりいい生活を遅れてなかったようですねえ。」

「まあそりゃな。」

家が貧乏だったし、親はフリーターだったし、俺はバイト漬けの生活だったし、ヲタクだったし。

「それでそのような人間の中から一人を選んで、その者を転生させようと言うことになりました。しかもその世界は現実ではなくアニメや漫画の世界です。」

え? MAZIDE?

「リアリティ真☆剣^{まじ}です。」

「方法それで、どんな世界に行けるんだ？」

「字が違うけど。・・・・・・コホン、君に選択権はありません。」

我々が決めた世界に言ってもらいます。ちなみにあなたが行く世界はリリカルなのと言う、人気アニメです。」

つまり、俺がなのは達とラヴラヴできるということか。ナイスだ神！

「ラブラブできるかは、君次第なんだけど……。」

そんなことはないこういうの知ってるぞ。ほらっ2次創作の小説でもあるじゃんか。転生したオリ主はもてるって。あと心を読むのやめてくれないか？

「うーん、なんか違う気がするけど。それと心を読むのと言うことについてけど違うんだ。僕は心を読んでるんじゃない、自動的に人の思っていることが入ってくるんだ。だからごめん、僕にはどうすることもできない。」

「そうか、なら仕方ない諦めるわ。」

「ごめんね。」

「フヘヘヘでもなのは達との恋愛か。胸が高鳴るなあ。」

「胸を高鳴らせているところ悪いんだけど。次の話に言っているかな？」

「ああ、オツケーだお、さっさとしてくれないか？」

もう早く、なのは達と添い遂げたいんだ。

「増長し始めた。……はやく終わらせて次の仕事に移ろう。一

応君にはアニメの世界、それも戦闘がある世界だ。そんなところに君を送ってそのままのたれ死なれたら困るからね。三つまで僕が叶えられることなら叶えてあげよう。何か要望はあるかい？例えば魔力量を無限にしてくれだとかそんなのでもいいよ。」

ふむ、最近の神様はわかっていらっしやる。

三つなら最強の俺がさらにチートなるには充分だな。

「まず一つ目はジャンプにのっていたためだかボックスって漫画に出てくる過負荷マイナスと安心院なじみの能力をくれ。」

「もっと凄いものを要求してくるかと思ったけどそんなものか。あ、でもさすがに安心院なじみの能力の方は現在判明している能力だけになるけど、それでもいいかい。」

当り前だろう、いくら能力があっても使い方がわからないんじゃない意味がない。

「そのかわり、過負荷マイナスの不都合な点は消して欲しい例えば荒廃した腐花レシブの手で触れたものを問答無用で腐らせるところをなくしたり、大嘘憑きオールフイグシオンのなかったことをなくすことはできないというところをなくしてくれ。」

「わかったよ。それぐらいなら何とか。」

聞きわけがよくてよろしい。

「そして二つ目だがユニゾンデバイスが欲しい。綺麗でエロい娘を所望する！」

そういうと神（自称）は露骨に嫌そうな顔をして言った。

「うわっ、ちょっとだめだろこいつ、本当に上層部はこんな人間を転生させる気なのか。・・・・まあとやかくいわないでおこう。それで最後の三つめは？」

「まともな家族が欲しい。」

俺が答えると神（自称）は額に手を添えてきた。

「君、熱でもあるのかい？」

こんな急に発熱するか！それに転生するってことは俺は死んだんだろ、死因は知らないが。

「すまない。ちょっと頭のおかしい君からそんな言葉か聞こえてくるなんて思いもなかったもので。理由を聞かせてもらってもいいかい？」

「・・・・・・なのは達とは家族ぐるみでのおつきあいがしたいのだ。~~~~。ワーハッハッハッハッハッハ。」

神（自称）は某行動マスクマンのモノマネをすると諦めるかのようにポケットから何かを取り出した。

「その言葉の裏に何を隠しているのかは知らないけど、余り自分に嘘はつかないようにね。」

何を言っているのやらからないな。

「さっさと送ってくれ。」

ようやく甘く日々が送れるのか……フヘヘ。

「はいそれじゃあ行きまーす。」

神（自称）は野球の投手が投げるように振りかぶるとポケットから取り出した物を投げ、その何かが俺にぶつかる中に入り込んできて、それと同時に意識がなくなった。

第1話来た！オリ主人生の始まりが！（後書き）

あれ？なんか案外普通の転生ものかもしれない……。アドバース、意見などがございましたら感想の方にお書き下さい！それではここまで読んで下さりありがとうございます。

あ、主人公の名前はたぶん次回に発表となります。

それでは次回更新までさようなら！

第2話始まりは神社から（前書き）

第2話なのにもう先が不安になってきました。
それではどうぞ。

第2話始まりは神社から

意識が回復すると、そこは見たことも無い場所だった。

「ここは、神社？」

鳥居が見えた上に、自分がいるところは賽銭箱の上だ。

なんて罰当たりな、まあ神と言ってもあれだろうけど。

とりあえずいつまでも乗っているわけにはいかないので降りた。そしてボーッとしていると、犬の散歩にお姉さんが通り掛かった。

ウホッ、いい女。モブでもいいキャラ造形してるよな。

「キヤッ。」

いきなり犬が巨大化しただど!?まさかここは海鳴か!

しかも原作が始まっている。

ということは

ここでジュエルシードを確保↓なのはかフェイトに渡す↓ルートイン!

そうとわかればさっさと確保だ。・・・封印はどうしよう。

「マスター、私にサポートは任せてください。」

どこからか声が聞こえてきた。

もはや化け物と化した犬も怖い、何も無いところから聞こえてくる声の方がよっぽど怖い。

「どこにいる！？姿を現せ！」

「あっ、申し訳ございません。今身体を構成します。」

俺の目の前に背は160ぐらいあり、腰ぐらゐまでかかって綺麗に整えられた雪のように白い髪をして、対照的に澄んだ黒く柔らかい眼を持った少女が現れた。

「無事、身体の構成に成功しました。」

「えーっと、お前は何ぞ？」

「私はユニゾンデバイスです。この姿はあなたが最も理想とする姿を映しました。」

ほうほう、下からなめまわすように見ると確かに自分の理想の女性像と合致する。ん？急に視線が鋭くなったような気が

「マスター、視線がいやらしいです。私は別によろしいのですが、時と場合を選んでください。」

そういうとユニゾンデバイスのユニ子（仮）は犬の方を向いて臨戦態勢を取った。

いや、別に大丈夫だと思うんだけどなあ。

「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！
！」

ジュエルシードを取り込んだ犬は飛びかかって来た。
バカな奴だ、お前ごときが俺にかなうはずがないだろう。

「アイスファイヤ
凍る火柱！」

俺よりも前にいたユニゾンデバイスのユニ子（仮）にその牙が届く寸前に俺の周りからユニ子（仮）の周りの温度が下がっていくつもの氷柱が現れ、化け物を串刺しにした。説明しよう凍る火柱とは体温を自由自在に操ることができる能力なのだ！さっき地面から氷柱を出したのは気温が下がるほどに体温を冷やしたらなんかできた行き当たりばったりな行動の先にあるものであった。って誰に俺は説明しているんだ？まあいい。

「これが、マイナス過負荷強い、強すぎるぞ。オールフイクション早く大嘘憑きとか不慮の事故とか使って暴れてみてーな。フへへへ、あユニ子くん（仮）封印してくれたまへ。」

「ユニ子と言うのは、私の名前ですか？」

「あぁん？お前にはこの（仮）が見えないのか？」

「そんなもの誰にも見えません！」

全く最近のデバイスは……まあ綺麗でエロそうなボディをしているから許すか。

「今絶対私のことを変な眼で見ましたね！」

「そんなことないって、ちゃっちゃと封印してくれ、誰か来るかも

しれない。」

鋭いな。少しエロは自重しよう。ムツツリ商会の店主にエロは自重すべきと言われたくないからな。
あとラヴラヴライフが送れなくなったら嫌だし。

「ジュエルシード、封印！」

ユニ子（仮）が何式かはわからないが、何らかの魔法を使ってジュエルシードを封印した。

「お疲れさん。そのジュエルシードはお前が預かっておいてくれ、デバイスお前しかないし。」

俺はユニ子（仮）の頭を撫でた。

うん、こういう些細なことから好感度は上がって行くんだよ。

「マスター、お誉め頂けるのは嬉しいのですが、少し背伸びしすぎです。見るに堪えません。」

身長・・・・・・・・やっぱり体も9歳ぐらいになってるか。

まあ9歳でも充分俺には魅力があるはずだ、そうに違いない！

「とりあえず犬を。」

ジュエルシードから分離し、元の姿となった犬を抱きかかえ、怪我をさせてしまったことに気づいて大嘘憑きですべて無かったことにした。ついでに氷柱も。
オールフイクション

「ヘッヘッヘッヘッヘ！クウーン！」

「うわっ、やめろって。」

犬は元気になると尻尾を振って、顔を舐めてきた。正直言って可愛い
がくすぐったい。

「ほら、お行き飼い主が待ってるよ。」

離してやると、気絶している飼い主のもとに駆けて行っただ。

飼い主はまだ目を覚ましていないが多分大丈夫だろうと思って、俺
は境内に座ることをユニ子（仮）に促して、自分もその隣に座った。

「さてと、自己紹介からいってみようか。俺は洗斗、長良井洗斗だ。
まあこの世界では何て呼ばれるかわわからないがな。」

「私は……まだ名前を頂いてはおりません。マスターのお
好きな名前をお付け下さい。」

これは……プリメか！

名前は何にしようかな。この際ものすごく激しい名前を！
と考えていたが一つ気になった所があった。

「スウリル、スウリルだお前の名前は！」

「そうですか……理由をお聞かせいただいても？」

「さつきからずっと暗い顔をしていたからな、お前にはフランス語
で微笑みという意味を持つスウリルにする。何でそんなに暗い顔を
しているのかはわからないが、少しは笑顔になりやがれ。」

「マズダー。ううっ。」

すると急にスウリルは泣きだしやがった。

「泣くな！わめくな！とりあえず落ち着け！……落ち着いたな？」

「はい、申し訳ございません。」

と口では落ち着いたようにふるまっているが、実際は涙をこらえているようだった。

「どうして泣いているんだ？」

「私は、今まで主にこれほど優しくしてもらったことはありません。」

「それは、俺以外にも誰かがお前のマスターになっていたというところか？」

「はい、今までで100人以上の人間とコンビを組んでいました。100人！？規格外すぎるな。まあ俺もだが。」

「ですが誰一人私に名前をくれることはありませんでした。当り前です、彼らは私を道具としてしか見ていなかったのですから。」

「そんなひどい奴らだったのか！」

まったく神（自称）もわけありなものを送って来たな。まともな家

族は本当にまともなのか気になって来た。

「ですが私の心は晴れました。マスターに出会えて。」

さつきとは打って変わって、屈託のない笑顔を向けてくる。

まさかのデバイスとのフラグがKITAAAAA
AAAAA!

さすが、俺！モテるな……この調子でなのは達も、クッククッククッククッククッククック。

「確かジュエルシードの反応はここからだっただけ。あ、そこの君達、ちょっと聞きたいことが！」

ジュエルシードか……ふうん俺と同じくなのは達を狙っているものか。だがなあなのは達は俺と付き合うことになってるんだよ、これが！

「軽くひねるか。」

そう言って、俺は声をかけてきた少年に、ゆらりゆらりと近付いて行った。

第2話始まりは神社から（後書き）

というわけで今回は神社のジュエルシードのお話でした。

これは謝辞でリンム様、珀狼様感想ありがとうございました。

そして次回なのですが今回の最後に出てきた謎の少年の正体が明らか
されます！

次話も期待しないで待っていて下さい！

第3話戦闘?そんなもの勝敗は常に決している! (前書き)

ふう、疲れました↑ゲームのやり過ぎ

第3話戦闘？そんなもの勝敗は常に決している！

さすがにいきなり襲い掛かって戦闘になるのは面倒なので、ガキの話を聞くことにした。

「何？」

「えっと、このへんで青い宝石みたいな石を見つけなかった？」

「知らないよ。」

「そっか、それじゃあそちらのお姉さんは？」

俺はスウリルの方を見て”余計なことは喋るな”と目で訴えかけた。

「ああ、それってこれのことでしょうか？」

スウリルは何もためらうことなくジュエルシードを取り出す。

HU☆ZA☆KE☆RU☆NA！

ガキは指でジュエルシードをさしながら言った。

「ああ、それだよ！……その突然で悪いんだけどそれを譲ってくれないかな？危険なものなんだ。」

「どうでしょうか。これは私の物では無くてマスターの物ですし。どうします？」

「当然却下だ。これは俺のキャッキャウフフなライフの為に有効活用する。」

当り前だ、なぜこんなガキにやらなきゃならん。
ガキはそれを聞いてこう言った。

「なら僕と、僕と勝負してください！僕が勝ったらそれはいただきます！」

えー、面倒だな。それに早くこれは届けに行きたいのに。

「だが断（ry）」

きっぱりとガキに向かって言う。

「そこを何とか。」

俺がスウリルを連れてどこかに行こうとするとズボンを下ろすかの勢いで、ズボンにすがりついてくる。

おやおや、そんなに俺を崇めたいのか、全く熱心なガキンチョだ。

「マスター？どうしてそんなにニヤニヤしているのですか？」

「気にするな、フヘヘヘヘ。」

この優越感に浸っていたかったが、さすがにうっとうしくなってきた。

「おい、そこまで俺のことを崇めるのだったら相手をしてやってもいいぞ。」

寛大な処置をありがたく思うがいい。

「やったー！それじゃあ行きますよー！」

ガキは律義にもあいつがすがつてきたことで少しづり落ちていた（とはいっても2センチぐらい）ズボンをあけてから離れた。

「ディフェンドハート、セットアップ！」

ディフェンドハート（笑）、完全にレイジングハートのパクリだろう。

服装もなのはバリアジャケットを男用に変えたただだし。まったくモブキャラはどこまで行っても笑わせてくれる。

「あの、あなたはデバイスをセットアップしないのですか？」

「はあ？俺はデバイスを持っていないだけだが？」

このガキはどうしてそんなこともわからないのか。

「マスター、彼は初対面ですし。それにマスターには私がいるでしょう？」

「・・・・・・・・・・あ！」

そう言えばユニゾンデバイスだったな・・・・・・・・俺にデバイスは必要ないねだって最強の能力じゃくてんを持っているのだから。

「え？お姉さんデバイスなのですか？」

「はい、私はスウリル主洗斗に使えるユフガッ！」

スウリルが余計な情報を与える前に口をふさぐ。

「ケホッ、マスター、何するんですか!？」

「スウリル、お前のにゃんにゃんでわふーなことは話すな。」

なんですか、それは!とスウリルが突っ込んできた（突撃）が軽く無視。

「勝負の前から既に瀕死状態だけど、始めようか。グフッ。」

少し拙いな……エプロン先輩のように戦いでは大嘘憑きオールフイクションに頼りたくないし……。

ん? まだ勝負は始まっていない。

俺はすぐさま大嘘憑きオールフイクションを使い体の痛みとダメージをなかったことにした。

「血をはいていたのに、消えた!？」

「くくくく、これで勝つ。さあてやるか。スウリル手出しするなよ。」

「マスターが、そうおっしゃるならば、わかりました。私は傍観させていただきます。」

俺は視線をガキに戻すととりあえず様子を見るために何の考えもなくただガキの周りを走る。

「クロスシューター!」

ガキは銀色の魔力弾を作り出すとこちらに発射しだした。
俺は走り回っているの、当然当らない。

「アタラナイ、アタラナイ。」

「何をお！」

少し馬鹿にしてやるとガキはムキになって、乱射してきた。
数発当りそうになるがすんでのところで回避する。

そしてしばらくこのやり取りを続けていたがガキはまったく疲労を
顔に表さない。むしろこの最強な俺のほうが疲れてきているぐら
いだ。

「はあっ、はあっ。」

「マスター、危ない！」

スウリルがそう叫んだ瞬間何か固いものにぶつかった。

「今だ、アスタリスクバスター！」

ガキのデバイスから三本の光線が発射されそれが絡まりあい一本と
なって俺に直撃した。

「ギィヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

痛い、痛いぞお！っていうかさっきの固いものは何だ！？

「くっ、マスターが鳥居ごときに屈するとは、情けないことです。」

え？なに？この俺が鳥居にぶつかってそれからガキの攻撃をくらってノックダウン？ふざけんなよ………待て、いや別にいいか。

「僕の勝ちですね。」

「……………」

「これをどうぞ、ジュエルシードです。」

何も言わない俺を見て、スウリルはジュエルシードをガキに渡した。

「ありがとうございます。……僕、かしわだふうき柏田風紀ふうきっています。あなた達の名前は？」

「……………」

「私は先ほども申し上げた通りスウリル。こちらの方は洗斗、長良井洗斗です。」

「そっか、スウリルさん、洗斗。またね！」

何がまたねだ、うっとうしい二度と来るな。

柏田が階段から降りて行くのを見送ってから、スウリルはようやくこちらにやって来た。

「マスター、いつまでそうして治さないでいるのですか？」

俺はまだ地面に倒れているままである。

「スウリルくん、もうすぐここなのは達が来るのだよ。だからここで怪我をしていれはなのと……ムフフフ。」

「マスター、残念ですがこちらに近づいてくる魔力反応がありません。」

「な、なんだって――――！！！！！！」

認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものは

「はあ、しょうがない。」

オールフィクション
俺は大嘘吐きでさっきの砲撃でえぐれていた部分の鳥居と自分の怪我を無かったことにした。

何でここに来ないのだろうか？・・・WAKA☆RAN☆N

風紀
side

僕はジュエルシードを持って、なのはちゃん達を捜していた。

「なのはちゃん、ユーノ君！」

「あ、風紀君！」

一人と一匹を見つけて呼びかけると、なのはちゃんは笑顔でこちらにやって来た。

「大丈夫なのか？ジュエルシードは？」

なのはちゃんの肩に乗っているユーノ君がこちらに移って心配そうに体を見ていた。

「大丈夫だよ。さきに洗斗が封印してくれたおかげで特に何もなかったんだ。それでジュエルシードは洗斗からもらってきました。」

「洗斗？それ誰なの？」

なのはちゃんは首をかしげながら聞いてきた。

「友達、かな？」

まだ僕にもわかんないや。

「何で疑問形？」

「気にしないで。おやつを早く食べに早く帰ろう。桃子さんとお母さんが待ってるよ。家まで競争だよ。位置についてー、よいドン！」

僕はユーノ君を落とさないように走り出した。

「いきなりは卑怯なの。」

「油断していたなのはちゃんが悪いよ。」

そして笑いながら翠屋に向かって行った。

第3話戦闘？そんなもの勝敗は常に決している！（後書き）

んまー何ということでしょう。

主人公のキャラが固まりにく過ぎることに笑いました。

今のところ自分の中で主人公は（勘違い系転生者＋主人公転生者）
÷2－100みたいなキャラになっていると思うのですが、勘違い
系転生者のアドバイスが欲しいDEATH↑スペルミス

まあそんなことは置いて、珀狼様、White Seal様、
good様感想ありがとうございます。

それでは次回魔法少女リリカルなのは 主人公はこの俺だ！ 第4
話KAZOKUそれは英語で言うところとふぁみりい をお楽しみに！
・・・思わなくていいです。

第4話 KAZOKUそれは英語で言うとふぁみりい (前書き)

オールでフィーバー!

であつたので

推敲・読み返ししてないでお送りいたします。

第4話 KAZOKUそれは英語で言うところのふぁみりい

さつき走りまわって少し息が上がっていたので今後どう行動するかなどの話し合いの場を設けることとなった。

「とりあえずこの世界には俺の俗に言うKAZOKUなるものがあるんだ。その人達を捜そう。」

「全く容姿もわからないのですか？」

「まあその辺はなんとかあると思う。」

俺みたいな遠くにいてもオーラでわかるだろう。
オリ主な俺は品格が違うぜ。

「なんだかマスターの考えていることが分かる気がします。」

「おおっ、そうかそうか。ならば言ってみせよ。私が思ったことを！」

「完全にキャラが変わってますね。……コホン、マスターは遠くにいてもオーラでわかるだろう、と思いませんでしたか？」

「さすがだな、大正解だ。」

これはいいかもしれない、戦闘中に言葉を交わすことなく思いが伝われば戦略の幅も増えるし。

あとエロいことを考えてそれがスウリルに伝われば……羞恥に悶える姿が見れる、ゲスゲスゲス楽しみでゲスー。

「また変なことを考えてますね。顔がにやけていますよ。」

おっと顔に出ていたか。

ゆるみきっていた顔を、引き締め凛々しいであろう顔（俺談）を作り直す。

「話は変わるが、お前のことを詳しく話してくれないか？動き出す前に少しはお前のことを知っておきたくてな。」

「私のことですか？」

「そうだ、とりあえず今知りたいのは、戦闘の立ちまわり方とスリーサイズだ。」

俺がキリッとした顔で言うと、スリーサイズと言う言葉を聞いた瞬間スウリルは顔を赤くして耳元で叫んで来た。

「戦闘の立ちまわり方はわかりますがどうしてスリーサイズが必要なんですか！」

耳が痛い。

「マスターがデバイスのことを知らないでどうする！だからYEAH！すべてをさらけ出せ！」

「マスターが外道に……もともとか。」

失敬な、これでも俺は世界で1，2を争う紳士だというのに……
……やっぱり143234171番目ぐらいかな。

「さあ観念して言うんだな。」

スウリルに詰め寄ると、顔を伏せてもしょもしょと何かを言ったようだが聞こえなかった。

「んんん？聞こえんなあ。ワンモアプリーズ。」

「はうっ！ううう、わかりました。」

どんなに小さな声でも聞こえるぐらい近づくとさらに顔を赤くして、何か諦めたような顔をした。

いよいよだ、いよいよ出るところは出てへこむべきところはへこんでいる体形のスウリルの謎が一つ解明される。

もう戦闘の立ちまわり方なんてどうでもいいぜ！

「私の・・・・・・・・スリーサイズは。」

「こうちゃん。スウリルちゃん！」

何だと！？見た目20代の美人な女性が俺とスウリルの名前を呼んで階段を上って来た。

後ちよつとの所でスウリルの秘密が聞けたのに！

ってあれっ？どうして俺とスウリルの名前を知っているのだろうか？

まあ俺の名前を知っているのはモブキャラとして当然のことだがな。

「ちゃんとここで待っていたのね。二人ともえらいわあ。もう引越しの荷物も整理し終わったし家に帰りましょう。お父さんもお姉ちゃんも待ってるわよ。」

この口ぶりからして……この人が母親!?

「お褒めいただき光栄でございます。」

スウリルはとても固く返事をした。

「もう、そんなに固くならないの。まあこれでもこうちゃんが初めて連れてきた時よりは柔らかくなっているけど、まだ固いわね。」

そう言いながら母親(?)はスウリルの頬をフニフニとつまんで笑っていた。

「お母さん?」

「どうしたの洗斗?」

俺が名前を呼ぶと母親(?)はスウリルにかまうのをやめ、こちらを向いた。

「あなたが俺のお母さんなの?」

「……熱でもあるのかしら? 洗斗が俺って言ったような……」

母親(?)は俺の額に手を当てて、熱を測るように自分の額にも手を当てて心配そうにしてきた。

「ごめんなさい。僕、お母さんをちょっと心配させてみたくてつい。」

「つか俺って言った方に反応してなかったか？」

「まあ♪可愛らしいこと。でもだめよ本当に母さん心配したのですからね。こうちゃんが私がお母さんなのなんて聞いてきて病氣じゃないのかと心配したのだから。」

額から手を離すと、母さんの顔は明るい笑顔に変わった。

「それじゃあ帰りましょうか。……あと魔法は使っていないでしょうね。この世界は魔法文化がないから使っちゃいけないとまでは言わないけど。使うときは結界を張るのよ、まあこの世界ではそう危ないことはないから大丈夫だとは思うけど。……もちろんそれはスウリルちゃんも同じよ。」

ふむ、つまり俺の家族は魔法を使える一家なのか。

「ねえ、お母さん。前に住んでたところって何ていう名前だったの？」

「あれ？知らなかったの？」

「当たり前ですよ、知っていたら逆に怖い。」

「まあどうせミッドチルダなのだろうけど。」

「ミッドチルダって世界よ。これから何度も行くとことになると思うわ。」

「ほら俺の予想は百発千中だ。」

「それじゃあこんな所で話していたら、日も暮れちゃうから早く帰

りましようか。」

「うん。」

「はい。」

母さんがてをつなごうと手を出してきたので、それを掴むと母さんは歩き出した。反対側ではスウリルが手をつないでいる、だがさすがに恥ずかしいのか顔をうつむけたままだ。

そしてしばらく歩いていると道場のある家が見えた。

すごいな、日本って探してみるとこんな家もたくさんあるのかな？

「ここが私たちの家よ。」

母さんが道場のある家の隣を指差して言った。

ふーん、隣が道場か、俺も門下生になれるかな？今度聞いてみよう。まあ今は家族がどんな人かが楽しみだな。とりあえず母さんは一般水準をはるかに通り越して美人でいい人だとわかったがあの神のひとだ。奇天烈な人がいるかもしれない。

母さんは家に入りスウリルもそれに続いて奥へと行ってしまったので、少し深呼吸して気持ちを落ち着けてから中に入った。

第4話 KAZOKUそれは英語で言うところのふぁみりい（後書き）

いやはやゝ今回はあまり暴走していませんなゝ（たぶん）。

やっぱり勘違い系転生者にスポットを当てて書くのは難しい。

敵なら書くのは簡単なのですけどねゝ。

とまあこんな感じなのでアドバイスは欲しいDEATT↑タイプミス

そして感想を下さった、白いサンタクロース様、珀狼様ありがとうございます。
ございました。

それでは次回も期待せずに待っていてください！

さようならゝ

第5話明かされる事実! 特にないです。(前書き)

ちよっとおかしな点があったので修正しました。

第5話明かされる事実！・・・・・・特にないです。

家の中に入るとそこはわふー！、ではなくて和風様相なが広がっていた。

っていうかこんなのみたことねえ。

俺があたりをきよろきよろと見回していると奥のふすまを開けて見知らぬ男性と女性が現れた。

男性の方は30代前半でいかにも働く社会人と言う容姿をしている。女性の方は14、5歳ぐらいで髪は肩よりも少しのぼしていて色はこの親からどうやって生まれたのか本気で気になる萌えるような、いや燃えるような真っ赤な髪だった。眼もそれに呼応するかのようになく鋭かった。

え？何でこんなに女性の方ばかり説明するかって？男性の容姿を聞いてもいみないでしょ？・・・・まあそう言うわけだ。

「おや、おかえり。」

「無事帰って来てくれてお姉ちゃん嬉しいよ。」

いきなり女性の方に抱きつかれた。

確かにこのようなシチュは大歓迎だが、その、モラルにかけていると思うんだ。

「あれ？洗ちゃん、今日は嫌がらないんだね。いつもならやめてくれ！っていうのに。」

ふむ、俺は常識人みたいだな。

それにもとからいたことになってるのか？

神もつとちゃんとしようよ！

「うーん、今日はちょっとこっちに越して来たばかりだからな。疲れているのだろう。引越しのあいさつ回りは明日行くつもりだから今日はご飯を食べてゆっくり休んだ方がいい。」

「うん、そうだね。そうするよ。」

「さあ、早く上がってもうご飯はできてるわ。とは言ってももらいものだけだね。」

本当はちゃんと作ろうと思ったのだけれどと笑いながら出てきた母さんはエプロンにお玉と言うまさに主婦ルックだった。

お姉ちゃん(?)に引ッ張られていくと奥の部屋には6人用の机にシステムキッチンがあるというだけの簡素な部屋に連れられた。テレビはないのかなー。

「洗ちゃん、今テレビはないのかなーって思ったでしょう?」

「ふえ!?!」

エスパー?それとも口に出てた?

「ど、どうしてわかったの!?!」

「フッフ、私はね、洗ちゃんのことなら何でもわかるんだよ。」

と言ってまたお姉ちゃん(?)は抱きついてきた。

むう、苦しい。

「こらっ!また能力を使ったでしょう!」

「やっぱりお母さんにはばれたかつ！」

「能力？」

魔法じゃないのか？

「そうだよ、冴ちゃん私にはね人の心が読めるっていう稀少技能レアスキルを持っているんだよ。」

ふむ、オリ主であるこの俺の姉だな。

「でも相手の精神を破壊する可能性があるから使っちゃだめだって言われているでしょう！」

ゑ！？そんなに危険なものだったの！？俺って結構使われているんじゃない。まさか結構マインドクラッシュサレタリシター、考えるのはよそう。

「でも冴ちゃん以外の心は覗いたりしないよ。冴ちゃん以外の人なんて興味ないもん！」

「もうまたそんなこと言って！、香音かうね待ちなさい！」

えっとまさかこの人って、超絶なブラコン？

「はあ、全く香音は・・・冴ちゃん何ともない？」

そう言って母さんは精神のことのはずなのに姿勢を低くして体のあちこちを触って異常がないか確かめてきた。

こういうの初めてだな前の世界では母さん父さんもこんな感じの人じゃなかったし、新鮮だ。

「洗ちゃん？」

無反応だったためか母さんは心配そうにこちらを見てきた。

「うん、大丈夫だよ。」

「そう、じゃあ早く席についてご飯を食べましょう。」

「うん！」

結局お姉ちゃんはずぐに戻ってきた。スウリルはこんな家に興味があつたみたいで家の間取りを把握しに行っていたらしい。父さん(?)は昔はここらへんに住んでいたそうで知り合いに会ってくると言って出かけてしまった。

そして目の前には手の込んだ料理が並んでいた。

「じゃあいただきます。」

手前にあつたきんぴらごぼうを箸で掴み口に運ぶ。そして一噛みすると口の中にしつこくない甘みが広がった。

「美味しい。」

「そう、よかったわね。」

「そう言えばお母さん。これを作ってくれたお隣さんって？」

第5話明かされる事実!・・・・・・特にないです。(後書き)

はい、5話目にしてすでに行き詰ってます。
さっさと原作に食い込ませないと・・・・

とまあそんなことより!

白いサンタクロース様感想ありがとうございます。

それでは今日はこの辺で!

第6話 ドッキドキ!?! ちょっとこれはマジやばいんじゃないの? (前書き)

お久しぶりです。

全然創作意欲がわかない・・・どうしたらいいのでしょうか

あと、風邪をひきました。

鼻水がつらいです

第6話 ドッキドキ!？ ちょっとこれはマジやばいんじゃないの？

食事の後、スウリルを連れて自分の部屋だと思われる部屋にいった。内装は可愛らしい印象を受け、男の部屋だとは思えなかった。

「スウリルの方が主導権を握っているのか・・・ちくせう。」

自分一人の部屋が欲しいよー。

「マスター、この部屋にある家具ですが。二段ベッドに私たちの服が収納されているクローゼットやその他娯楽用品はわかるのですが、二つの机は何でしょうか？」

スウリルに言われるまで特に気にすることはなかったが部屋の一画がおかしいことに気がついた。

机が2こ並んでいるのだ、しかも勉強机。

片方には小学生用の教科書が整頓してあるため、俺の机だと予測できる。

だが、もう一つのほうには中学生、またはそれ以上の教材が置いてあった。

「スウリル、お前ってどれぐらいの学力がある？」

まあ当然オリ主の持つべきデバイスだ。それに相応しい実力は胸同様盛っている、でなく持っていることだろう。

「私は人間の一般教養でしたら、大学卒業レベルの学力を所持しています。あと私はどこも盛っていませんからね、マスターには嘘をつくことはありません。今までも、これからも。マスターが私のマ

スターでいるかぎり。」

軽く心を読まれた上にセクハラなことに茶化することなく真摯に応えてくれた。だが、心が筒抜けだと大変だな。

まあその対策はまた考えるところとして……大学卒業レベルかまさに相応しい能力だな。さて、それじゃあこの机は……悪い予感しかないな。

少し現実逃避を始めようかと思ったときに部屋のドアを開けてお姉ちゃんが入ってきた。

「ふう、お風呂気持ちよかった。あれ、洗ちゃんどうしたの？ 鳩が豆鉄砲くらったような顔をして。」

「いや、どうしてここにいらっしゃるのかなーと思ひまして。」

そういうとお姉ちゃんは少し濡れて艶やかになっている紅い髪の毛をドライヤーで乾かしながら答えた。

「もちろん、ここが私たちの部屋だからだよ。」

もうわかりきってたことなんだけどね。現実をこう前に出されるとね……

「で、でもベッドは二つしかないよ？ たらないんじゃない？」

まだ現実を認めたくなくて、もっとももそんなことを言うてみる。だが、お姉ちゃんは今度は髪をとかしながら答えた。

「スウリルちゃんが上で寝て、洗ちゃんと私が下で寝れば問題ないでしょ？」

ガラスが砕け散るように心が割れていった。
なんでやねん！この人頭おもしろいことになってんやないのか？
何か使えへん関西弁つこてもうたわ！

「じゃあいつしよに寝よ♪」

お姉ちゃんが手を差し出してきた……これはいったいどうしたらいいんだ！

人としていいのか？……………
・否！断じて否であるぞ！間が長かった気がするけど。

「スウリル〜？」

「マスター、香音さん。おやすみなさい〜。」

俺のデバイスは薄情なようです。

「さて、私たちも寝ましょう。」

腕を強く握られ、ベッドに連れ込まれた。

この世界に来てまだ一日目洗斗大人の階段登ります！

ベッドの端に行き、お姉ちゃんに触れないように寝ることにした。
でもそんな俺の考えとは裏腹に、お姉ちゃんは……

「洗ちゃん、あったかい。」

抱きついてきました。ジーザス、神よ。あなたは私を見捨てたのか。

「まあいいか。とりあえず面倒なことは明日考えよう。」

そう思って、意識を飛ばし・・・たかった。

寝れん！寝れないぞお！

後ろからは女の子特有のいいにおいと温かみと柔らかさが来てるし！俺も一匹の狼何だぜ・・・これは何をしてもいいということなんだよね？

狼になってもいいんだよね？よし、なるぞ。狼に！

意を決し、後ろを向こうとしたとき

「・・・・・・・・マスター？」

圧倒的な殺気と共にスウリルの声が聞こえてきました。

・・・・・・・・・・やっぱり寝よう。

今度は割と簡単に意識を飛ばすことができ寝ることができたのであった。

第7話ついになのはとの邂逅か!?(前書き)

お久しぶりです・・・・・・・・・・勉強とネットゲとガンダム!が忙しいです。

あ、ガンダムは気にしないでください
それではどうぞ

第7話 ついになのはとの邂逅か!?

翌朝目を覚ますと

「んー。」

「なにやってるの?」

お姉ちゃんの顔が眼前まで迫っていた。

「今このまま洗ちゃんの顔を見つめているか、起こすかを思案中。」

「もう起きてるよ。」

「………あ。」

少しフリーズして、そのあと俺が起きていることに気がついたようだ。

「マスター、香音様おはようございます。いい朝ですね。お母様より、二人とも起きたら着替えてリビングに下りて来るようにと。ご飯は出来ていますから。」

それだけいったスウリルは、現在の状況に何も突っ込まず。部屋を出て階段を下りていった。

「なんで!?!今の状況をツッコミいれてからいけよー!」

「洗ちゃん、何してるの?早く行くよ?」

渾身の叫びを発している間に、お姉ちゃんはベッドから下り、着替え終わっていた。

「はやっ!?! いつの間に着替えた!?!」

「「なんで!?! 今の状況をツッコミいれてからいけよー!」のところでさっさと着替えました」。

ハア? 早すぎだろ!?!

「そう、早すぎる。これこそお姉ちゃんクオリティー!」

「しかも心読むなあ!」

マインドクラッシュしたらどうするんだ!

「大丈夫だって、ちゃんと口にててたから?」

「マジで!?!」

まずいな、そんなんじゃ。明らか変なことを口走るかも知れない。しかも自覚なしで。

「冗談だよ。お姉ちゃんは稀少技能無しでも読心術ぐらいできるよ。洗ちゃん限定だけれどね。」

「それはそれで怖いな。」

「大丈夫。ちゃんと普段は洗ちゃんのことしか考えてないからたい

てい読めてないから！」

「それはそれで（ry）」

もはやブラコンってレベルじゃねー、もっと恐ろしい物の片鱗を感じたぜ。

「早く降りてきて下さい。朝ごはんが冷めてしまいます。」

一階からスウリルの呼ぶ声が聞こえてきて、会話を一旦終了し服を着替えて下に降りた。だがしかしどうやって早く着替えたのだろうか。その謎を解き明かして下さい、それだけが僕の願いです。リビングに入るとまだ引越したばかりという雰囲気の一部屋に置かれたテーブルには健康バランスを考えられていそうな食事が用意されていた。

「マスター、そんな所に突っ立ってないで椅子に座ってください。」

「あ、ああ。」

俺は朝食が用意されていることに感動を覚えて茫然としていた。なぜ感動を覚えたかって？

もちろん言ってみただけだ。まあ口には出していないが。

「マスター、口に出ていますよ。」

「ふ、言わずともにじみ出るとはこれは主人公なことが板についてきたようだな。」

「アホなことを言っていないで座ってください。」

スウリルに軽く頭を叩かれ、イスに座らされた。
まったく、アホなことは言っていない事実を述べたまでだというのに。

「スウリルちゃんも座って食べて頂戴ね。今日は御近所にあいさつに行くつもりだから。結構回るわよ。」

元気はつらつといった母さんの様子に、少しテンションが萎えてしまったが食べた朝食が美味しかったのでよしとする。ちなみに父さんは仕事らしい、金回りがよさそうで何よりだ。
朝食を食べ終え、少し準備をしてから外に出た。

☆☆☆☆

結局お姉ちゃんは学校の学業用品で足りない物があつたとか無いとかあいまいな感じで出て行った。

なので母さんとスウリルの三人で隣の家、もとい高町家の前まで来て。俺はインターホンを押した。

ついに原作キャラとの邂逅か・・・wk wk がとまらねえ！ラヴ
ラヴな人生にダイヴトウダアアアイヴ
・・・なんか落ち着いた。

「はい、高町ですけど。」

わざわざ若い女性の方が外に出てきて下さった。
えっと茶髪だしなのはのお姉さんかな。

「改めまして、昨日引越してきた長良井と言うものです。以後よろしく願います。」

昨日借りてきた容器にソバを入れたものをなのはのお姉さんに手渡

した。

「これはこれは御丁寧に、まあ手打ちそばですか。ありがとうございます。」

なのはのお姉さんはニコニコしながら容器を受け取った。

「あの、いきなりですが妹とかっていますか。」

本当に突然言ったため少し驚いたみたいだがすぐに持ち直し返してきた。

「息子さんね。．．．私には妹はいないけど娘が二人と息子が一人ならいるわ。」

あ？人妻？．．．．．ってことは

「もしかして、高町桃子さんですか？」

「どうして私の名前を？」

あつ、やべなんかへんなこっぽく思われているような気がする。

「えっとその、雑誌で見たことがあったような気がする。」

あったよね、多分雑誌あったよね。

「あら、そうだったの。結構マイナーな雑誌だったから読んでいる人は少ないと思っていたのだけれど。」

セーフ！ありがとうマイナーな雑誌いいい
ちよっとミスをしてしまったことをなんとかフォローして一息つい
た所で、母さんと桃子さんは会話を始めてしまった

「あ、洗斗くん。私の娘の下の子、なのはって言うんだけど多分同
い年だと思うのだけど。」

おや、まさか今すぐ会えるフラグですか。

「もう学校に行っちゃって、もうちよっと早く来てれば会えたの
に残念ねえ。」

結局会えないのかYOOOOOOOOOOOOOOOO!!!

と言うわけで、二人の主婦の世間話に3時間付き合わされる羽目に
なりましたとさ。ヂグジョオ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8482u/>

魔法少女リリカルなのは 主人公はこの俺さ！

2011年11月17日03時53分発行